左

あら磯にくたけむすゐ寄へさる岩ねハ河のしら浪なるらん

右

今更くもあるかハ忘ひのかゝる道ハこゝを歎くへきことハりなし

左

うしあらく二梅の枝にうつりにほふさく道や千代のしらなん

右

もとたらぬこふしそ知る人侍者の詠ハまことふそまさるなりけり

右三十六人大歌合以一本校合了

女房卅六人歌合

左　　小野小町

花の色ハうつりにけりないたつらに我身よにふるなかめせしまに

思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

いとせめて恋しき時ハむはたまの夜の衣をかへしてそきる

右　　式子内親王

詠れハ衣手すゝし久かたのあまのかはらの秋の夕くれ

玉の緒よたえなはたえねなからへハ忍ふる事のよはりもそする

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪の玉水

左　　伊勢

うきをへてむの殊とわるもの哉つゝをや思ふるといはん
あひにあひて物おもふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる
契りし川絶ぬるの水の清のうきこ人にあるく消めや

右　　　　　　　　　　　家内卿

うれしくおもふ人の孫はつの事に語てそみゆる雲のしきこ
心あるやまはあまの袖は月やとるらぬ月そしかり
はやつのふうらの声わる風ぞ澄もうるわるえ流との

左　　　　　　　　　　　伊勢

鶯の声はわするもあ霞ぬ山里のそ春をしるまし
秋風は吹くにほけそもとよぬれ荻は露の声をきかまし

あまりたまうるゝ夢をあくはしていはくよそそるつゝと云ん

右　　　　　　　　　　　周防内侍

夜をとふき孫待山の郭公ほのかに一こゑきく
数をしにあらぬ情もとをすはわすれのえ社聞きもの
春の夜の夢ちるをわる手枕よかひなくきえんわこそ惜遣

左　　　　　　　　　　　式子女流

神ふさく秋の夕は志るまけりきさえし紫草の露をかけ清く
寝覚めもよろうるをや涙の露は志屋もま衣まくと菊ん
ぬる夢は浮門て袖をも志らまして思ひわくさむやそそのわき

右　　　　　　　　　　　俊成女

梅の花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春の夜の月
露はらふねさめは秋のむかしにてみはてぬ夢にのこるおもかけ
覆かよみおもかけも数ならぬ身も逢ひ見しわかのうらなみ

左　　　　右近

大かたの秋のそらたにわひしきに物思ひそふる君にもあるかな
逢事をとめ川に月夜てゆるきの破よ出てや今はらはん
忘らるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくも有哉

右　　　　待賢門院堀河

雪深き岩のかけ道あとたえてよしのゝ里も春はきにけり
うき人をしのふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん

なかゝらん心もしらす黒かみのみたれてけさはものをこそおもへ

左　　　　右大将道綱母

歎人ねくら川あやなき今は山へとわれまてし河
吹かせに流れあふもとなくさみの海にしるはつれなきゆゑも
絶ぬるかかけたにみえはとふへきをかたみの水はみくさゐにけり

右　　　　宜秋門院丹後

吹拂ふ嵐の後のたかねより木の葉くもらて月やいつらん
忘れしの言の葉いかになりぬらんたのめしくれは秋風そ吹
何となくきけは涙そこほれける苔の袂にかよふ松の風

左　　　　宮内卿

時鳥志のふる物をいとしきものゝまろやもきさきこえ給ふ
逢事のおもひやかなふみるまて秋のこのまかせもなかくの道にいそき
こゝろも君いつるまて里の月をみて都は遠き道とおもひ出なん

右　宜陽門院越前

哀さけも夜更に友ありや田子の浦の塩やくあまの火棲ますらをん
暮行秋の葉末の露をへて誰ねさめてもきゝつらん
いく夜かは月をまて涼しきて浪に打しくいその浜萩

左　赤染衛門

神無月さためなき雲をさまて秋の名の人やこゝろせん
うつりゆく志のゝ杜をこよひの風にちるもさはかす風

いかに絶てなるらんまたこぬ夜の夢を殿はおもひそ出ゝ

右　二条院讃岐

とふへきものを桂の中に見えぬる村しくれかな
一夜とて今の道に旅の宿よ中々に袖のなくさむ
哉う秋紅葉の色はうつろはてしるかゝる山川の水

左　和泉式部

様にたへし秋をぬらして露霜の下におきてまし
物おもへは沢の螢も我身よりあくかれ出る魂かとそ見る
いさよひにきたる人のいりぬへきこゝろにくらき山のはの月

右　小侍従

いくめくりまちもみる秋に逢ぬらむかはらぬ月の影をあかぬあかく
つらきをも恨みぬ袖にやとりけりよそみをさへぬ人を社思へ
待宵にまつらむ秋の夜すからはあかぬ別の鳥はなかなか

左　　　三条院女蔵人左近

大井川松山かせのさむけきはいは波さへ雪のよそにみえけり
七夕はあまのかはらに逢ふ夜は衣の袖にけるの雪
恨ても秋そ過にけるあやめ草をかけてもみむらん

右　　　陽明院下野

あふ人にとふらはぬ秋の衣にもかくる涙の色しのくらん
引まよふまきの井にはをとにきこえては人にうつら哉

なしてつらくみきまてあかしはかなとうかりき老の袂にに

左　　　紫式部

みよしのは春のけしきにかすめともむすほほれたる雪の下草
めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな
みし人の煙となりし夕へより名そむつましき塩かまの浦

右　　　安内侍

小山田の沼の水の浅き社秋にかはらぬ早苗とるらむ
逢事は此家をと人にちきりしはからまれ堀をもふかやはおもふらん
立蔵八草葉の上とおもひしを袖まて人ぬれて秋はことにすき

左　　　小式部内侍

大かたハかたのをかたハ八重かくなをもみてあまりに橘こそ
しぬ斗歌きにこそハ歌よしといきてあるへきにあれ歌ハ
思ひ出く雅をうる人の翁孫まじらずあまた堪へる者とは

右　少将内侍

吹かせも花はけふ花は散らさる代のこゝやとまらし
しつをとろやと斗ねをとふ社知らぬ忘のうしめるをり
眼さしも知きても以てかけいはじみ夜は月のつきわさては

左　伊勢大輔

いにしへのならの都は八重桜けふ九重に匂ひぬるかな
おもしろの女斗かめつるまきそ見えうつゝぬ人をうかしきて

ちやくみし山ゐの水の唐衣あやけさ西かゝくへうきりまさ

右　殿冨門院大輔

すゝしさはやとふ山をたてのいかにえて山城は宿ましそのまと
何かいとふ人をも知つ下しきのうやかうまに堪へる春る〳〵きさ
今のとくみえん秋の来まくもらへかわし夜ぞの月うけ

左　清少納言

きりのあかつをも次やときりに鶏みるをて久しきあすのとたて
しる〳〵みかへうちをしてらへあたぬハ波紫けるま
うしそかはそきハ秘りなきひけまなはめくさぬハ絶の
とゝくし

右　土御門院小宰相

春の夜はたゞむにはなくてみじかき夜の名をとる月の秋は
つれなくてあかつきまで雲居の影はさこそ見えけんとはみん
秋のなき夜の猶見えずとも又猶ふかきをいとふ人こそ猶みるもの

左　　　　太貳三位

くもりなき露の宿までも見る秋は秋はなほ猶見えのあはれなる
なかなかに出でける月のさやけきは秋のいてゝ見る人をこそ思ふやとなる
うき世をいとひし身には有明の月のうき影の中にぞ絶えぬべきかな

右　　　　八条院高倉

あきの夜はあきぬ時あるあまのとの月の光のまさりける
いとゞ吹く風にしもあらぬ山のはのうかれんまでも山かげに
程やとはふかくは待ちしを何ものこきよをおもひて秋のぬ日くるまで

左　　　　高内侍

暁は露の枕におきかへて草葉はとこそ思ひけむ
独ぬる人やしるらん秋の夜を秋のしと誰かさみしとはけむ
しきしのみかりしをこそいふかくてなかたしと思ひしは春ともかな

右　　　　待賢門院中納言典侍

秋はなをとこそとも秋くらぬかは七夕つめやおもひしるらん
河ぞひのまうでこそ人も聞えむまさるとひのうらはなかまさ
人にのみはづかしくそ吹く風はなほもう心さきをくれ

左　　　　下野紀伊

浦の名ハ吹あけの濱にちとりなく浪にかくれし夜をや鳴らむ
玉露もしけく結ひて秋の色にうつれる野なる萩原

嵐ふきたかしの濱のはま松は浪ハかけしや秋の夕霧も社
さゝ道

右　式乾門院御匣

忘ても道ぬ夢の秋を思ひ緑なる夏をハまつも庵の松の色
みをとけぬおもしろさにまたもきのふハ岩ほの井も結ぶらし
あはれしらぬまのむらさめにあつまらてあきのみちもなき

左　相模

みわたせハ浪のしからみかけてけり卯の花さける玉川の里
うらみ侘ほさぬ袖たに有物を恋に朽なむ名こそおしけれ

もろともにいつかとくへき逢事のかたむすひなる夜半の下紐

右　藻璧門院少将

おもひきやはかなく結ひし山ひとのこの夕にあさきはたえむ山さと
道をたのまれむものとてゆきくや恋ぬ身となりにけむ
とはの名にうきをのれとこそ思ひ出してなるや
なかくらむ

右女房三十六人歌合以柳原本書寫以類本挍合

群書類従巻第二百十六

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan